補増

生寫朝顔話

二六

四の切　宿屋の段

〔解題〕朝顔日記の原據は司馬芝叟の長話の一つである「葬」で、芝叟はこの話を本として、璃寛に宮城阿曾次郎をさせ度い希望で、狂言作者の近松德叟に話して歌舞伎に仕立てさせ、大抵出來上つたが深雪をさせる適當な役者がなくて上演を見ない中に德叟は文化七年十二月に歿した。處が翌八年に兩香園柳浪の讀本「朝顔日記」（十卷）が刊行され、これを粉本として文化九年に堀江市の側で「生寫葬日記」と題して市川團三郎の駒澤で興行したがさしたる事もなかつた。處が文化十一年春澤村田之助が江戸から歸阪したので、前の德叟の遺稿を奈河晴助が潤色して「けいせい筑紫繁」と題して田之助に深雪、璃寛に阿曾次郎といふ適役で上演して大當り大評判をとつた（傳奇作書殘篇中）。

この田之助の朝顔が大好評であつたのに刺戟されたものか。淨瑠璃の方では、天保三年正月二日から稻荷の文樂芝居で「生寫朝顔話」と題して上演された。その時の番附によれば、添削者耶麻田加々子とあるが、これは近

松德叟の別號山田案山子を襲名した人かと思ふが、天保頃の淨るりに添削の筆を執つたものが相當にある。〔初段〕大内館、松原、宇治川、茶店、岡崎、〔二段目〕明石船別、弓之助屋敷、大磯揚屋、〔三段目〕小瀬川、摩耶が嶽、〔四段目〕濱松、島田宿屋、〔五段目〕駒澤閑居、山岡屋敷、多々羅濱に別れて居り、島田宿屋の段は時の文樂座の櫓下竹本重太夫が語つて居る。

然るに重太夫は天保十一年五世政太夫となつて同年歿したが、その子鶴澤才二及び義弟鶴澤儀左衛門が翠松園主人に依頼して故人の語物に更に刪補を乞ひ「增補生寫朝顔話」と題して嘉永三年正月刊行された。爾來朝顔日記としてはこれが弘く世に行はれるに至つた。

藝州岸戸の家臣秋月弓之助の女深雪は一年宇治の螢狩で宮城阿曾次郎といふ美しい武士と戀仲になつたが、秋月一家は國許に騷動が起つて急に歸國する事となり、明石の浦で圖らず宮城とはかなき船別れをするや深雪はいよ〳〵思ひ焦れる身となり、大内家の臣駒澤次郎左衛門と緣談が起つた時、それが阿曾次郎とは夢にも知らず、言交した夫へ操を立てようとして家を拔出て小瀬川へ身を投げようとする處を助けられた。併しその助けられたのは荒妙といふ强惡の老婆で、摩耶嶽の隱家に伴つて逆待を加へ、遊女に賣らうとするを、この家の入聟となつて居た浮洲の仁三郎實は駒澤次郎左衛門の弟三郎春次に助けらて、又々夫の行方を尋ぬるうち、盲目となり、螢狩の時宮城の書いてくれた「露のひぬ間」の唱歌をうたつて辭命をつなぎ、それより島田の宿屋となるのである。（以下こゝに收めた場面）眼病平癒の深雪は關助に伴はれて駒澤の上屋敷に尋ねつき、こゝに主君大内義興の許しを得て晴れて夫婦となるといふ筋で、これに大内家に滅された大友一味の者と内通して居る惡人岩代多喜太が駒澤を暗殺して主家を滅さうとする隱謀、摩耶嶽の荒妙は大友宗鎭の遺孤菊姫を守り立て主家再興を計る女丈夫である事等を取合せて筋を複雜にしてゐる。二の口明石の船別れ、三の切摩耶嶽、四の濱松小家から切の島田宿屋等が名高い。

三畳へ入りにけり。地いづくにも。暫しは旅とつゞりけん。フシ昔の人の。筆の跡。つれ〴〵侘びる假宿の夜の襖の隙もりて。小オクリ風に。またゝく燈火の。本フシ影も。淋しき奥の間へ。地立歸る治郎左衛門。フシ何心なく座をしめて。ふつと目につく衝立の。張まぜの歌讀下し。詞テ心得ぬ。この張まぜの地紙の歌は。先年山城の宇治にて。秋月が娘深雪が扇に某が。また逢ふまでの形見にと。書いて與へし朝顔の歌。その後計らず明石にて。船がかりせし其砌。琴に合はして深雪が節付け。折ふし思はぬ互の出船。飽かぬ別れを悲しみて。女の手づから我が船へ投込みし此扇。然るに今また此家にて。思はずも此張まぜ。ア何者が唄ひ傳へて。計らず東の驛路に。見るも不思議と地ひとり言。其折からの。忍ばれて。眺め。入つたる時しもあれ。襖おし明け地こなたは扇押隱し。詞オ、亭主。先藥を茶に交ぜて。あなた樣へ差上げん

こなたへ參る砌。何か二人がひそ〴〵話。合點行かずと忍んで聞けば。しびれ徳右衛門フシ小腰かゞめて入來れば。

刻は。扨て〴〵きつい働き。危き難をとの。アヽコリヤ。サア恐ろしい工み。遁れしも。全くそちが志。サヽ是へエヽ憎さも憎し。直ぐに申し上げうと〴〵。ハヽ冥加に餘る御詞。エヽ最前は存じましたれど。それでは又どの樣

な科人が出來うも知れぬと存じ。へゝ幸ひ先日慰みに。求めました笑ひ藥。ヤコレ幸ひと。しびれ藥と取りかへたを。知らずに飲んださつきの時宜。この後とても旦那樣。御油斷はなりませぬぞえ。ホゝ其儀は某もとく承知致した。マそれは格別。この衝立にある朝顏の唱歌は。何人の手跡。又どういふ事からお身が手に入りしぞ。エゝそれでござりますか。その歌についてア哀れな話。エゝ元は中國邊。歷々の娘さうなが。何やら尋ねる人があるとて。親元を家出し。それより方々と流浪致し。はてはとうゞ〳〵目を泣潰し。跡の月までは濱松邊に。その歌を唄うて袖乞ひ。所に又國元から。所緣の女子が尋ねて來て逢ひました。ガ其女も程なう病死。それから又一人ぼし。この邊までその歌を唄うて歩きましたが。何が盲目でこそあれ。器量はよし聲はよし。見る程の者がいぢらしがり。朝顏々々というて。その歌を知らぬ者はござりませぬ。私も餘りの不便さに。此宿に足を留めさせ。今では宿屋〳〵のお客の伽。何とまあ。不仕合な者もあるものでござります。地と涙片手の物語も心にひしびし應ゆる駒澤。もし言交せしわが妻かと。轟く胸を押鎭め。詞ムゝそれはさて哀れな話。身も今宵は何とやらも淋しい。鬱散の爲その女を。呼び寄せる事はなるまいか。イヤモ何が扨て

お易い事。只今呼びに遣はしましよ。お慰みに琴か三味。ム、何分よきに頼み入る。地と言ふは仔細のあるぞとも。知らぬ佛氣德右衞門。フシ尻輕にこそ立つて行く。地跡へ相役岩代多喜太。のさ〳〵と庭に直り。詞ヤ駒澤氏。さぞ御退屈でござらう。コレハ〳〵岩代氏。殊の外お早い事でござる。地と表面は解けても解けやらぬ。前垂がけの下女おなべ。次の間に手をつかへ。詞申し〳〵。只今朝顏殿が見えました。是へ通しましよかいな。ナニ朝顏とは何者だ。アイヤ。此道中で琴三味を彈き。旅の徒然を慰むる賛女とやら。拙者も何かもの淋しうござれば。チト琴でも聞かうと存じ。亭主を頼み。呼び寄せましてござる。アイヤ。そりや止めになされ。とは又なぜな。サレバサ。先刻身どもが知音たる萩の祐仙。同席いかがと言はれた貴殿。乞食をば座敷へは通されまいかい。ハテ高の知れた盲目女。まんざら怪しい。ナ。ソレ。茶箱も持參いたすまい。地としつぺい返しにぎつくりと。言句に詰れど減らず口。詞左程御所望ならばともかくも。併し。座敷へは叶はぬ。庭へ呼出し。琴なと。三味なと彈かし召されて。早く此場をぽつ返されよ。地と飽くまで意地持つねぢけ者。寄らず觸らず駒澤が。指圖におなべは心得て。詞朝顏殿召しまする。朝顏殿々々々と地呼立つる。フシ無慚なるかな秋月の。娘深雪は身に積る。長地欺きの數の重なりて墻失ふ目なし鳥。杖柱とも頼みてし。淺香はもろく朝露と消え殘りたる身一つを。さすがに捨ても緣先の。飛石さぐる足元も。危き木曾の丸木橋フシ渡り。苦しき風情にて。地漸う坐して手をつかへ。詞召しましたは。此お座敷でござりますか。拙い調べもお笑ひ草。おはもじ樣や。地と會釋する。顏も深雪がなれの果。不便の者やとせぐり來る。涙呑込み控へゐる。岩代はそれとも知らず。詞ヤア見苦しいその樣で。我々が目通りへうせたは。エ、、、聞き及んだ朝顏めな。エ、きり〳〵立つて失せをらう。アイヤ〳〵岩代氏。さうもぎだうに仰せられな。この方に呼寄せたればこそ。思ひがけなうアイヤ。思ひがけなう來たものを。叱るは武士の情にあらず。コリヤ〳〵女。大儀ながら。その朝顏とやらの歌。サ、早く唄うて聞かせい。地と望む心は千萬無量。知らぬ岩代頑くらし。詞さて〳〵駒澤氏には。イヤモきつい御執心。コリヤ〳〵盲目。何なりともエ、唄へ〳〵。サ、早く〳〵。ハイ〳〵〳〵。唄ひまするでござりま

す。 地とこがるゝ夫のあるぞとも。知らぬ百日の探り手に。戀故心つくし琴。誰かは憂きを斗爲巾の。糸より細き指先に差す。爪さへも八つ橋のやつれ。果てたる。身を喞ち。涙にくもる爪調べ。

二上り唄 露のひぬ間の。朝顏を含。照らす日影のつれなきに合。あはれ。一むら。元私は中國生れ。樣子あつて都の雨の。はら〳〵と。降れかし。 詞ムム夫を慕ふ音律の。我々が身にも思ひやられて。思はずも感涙致した。ナウ岩代殿。いか樣。琴といひ器量といひ。イヤモ中々感心仕るて。イヤナニ朝顏とやら。そこは定めて冷えるであらう。身どもが傍で今一曲。サア〳〵所望だ〳〵。アヽイヤ岩代殿。もう赦しておやりなされい。さりとては駒澤氏。身國へ歸れば父母の。 詞思ひも寄らぬどもが望むを留めさつしやるは。ソリヤ意地の惡いと申すもの。イヤさうではござらねど。彼も定めて。疲れませうと存じて。ハヽア然らば曲はやめにして。コリヤ〳〵女。そちも腹からの非人でもあるまい。身の上話もまた一興。話して聞かせ。サヽどうだ〳〵。ハイ〳〵。よう問うて下さります。おい。お話し申すも恥かしながら。元私は中國生れ。樣子あつて都の住居。一年宇治の螢狩に。こがれ初めたる戀人と。カヽり語らふ間さへ夏の夜の。 地短い契りの本意ない別れ。所尋ぬる便りさへ思ふに任せぬ國の迎ひ。 詞親々に誘はれ。難波の浦を船出して。身をつくしたる 地憂き思ひ。タヽキ泣いて明石の風待ちに。たま〳〵逢ひは逢ひながら。つれなき嵐に吹分けられ。悲しさ。 地又も都を迷ひ出て。いつかは廻り逢ふ坂の。關路を跡に近江路や。美濃尾張さへ定めなく戀し〳〵に目を泣潰し。物のあいろも水鳥の。陸にさまよふ悲しさは。いつの世いかなる報ひにて重ね〳〵の歎きの數。憐み給へとばかりにて。聲をッシ忍びて歎きける。 詞テ扨て哀れな話。しかし男日照もない世界に。エヽ氣の狹い女だな。イヤもうしゆんだ話で氣が減入つた。寢酒でもたべ氣を晴らさう。イヤナニ女。暇をくれる立歸れ。ハイ〳〵。左樣なればお客樣。もうお暇申します。オ朝顏とやら大儀であつた。始めて聞いた身の上話。もし其夫が聞くならば。さぞ滿足に思ふであらう。ナウ岩代殿。左樣々々。ハヽア是はマア御親切なお詞。有難う存じます。 地と杖探り取り立ちながら。蟲が知らすか何とやら。耳に

殘りし情の詞。名殘り惜しさに。泣くく〳〵も。フシ心は跡にさぐり行く。地折しも奥より若侍。詞最早よほど深更に及び候。御兩所ともに早やお休み。いか樣。明日は正七つの出立。イザ駒澤氏お休みなされぬか。イヤ拙者は今暫し用事もござれば。お構ひなく先づお先へ。左樣なればお先へ臥せらう。ドリヤム、、、御免下されう。地と立上りしが胸に一物。心を跡に奥の間へ。フシ伴はれてぞ入りにける。地行く間遲しと駒澤は。手を鳴らして女を呼び。詞コリヤ〳〵。德右衞門に急々對面したし。呼んでくりやれと地言付けやり。旅硯の墨すり流し。以前の扇押開いて。フシ何か書付け用意の金子藥の包。取認める目の先へ。疊を貫く白刃の切先。氣轉の駒澤有合ふ溫湯刀に注げば。下には血汐と心得て。してやつたりと疊はね上げ。現はれ出づる笹久藏。駒澤覺悟と斬付くる。刄を恐れぬ煙管のあしらひ。廊下傳ひに來かゝる亭主。ス ハ何事と窺ふ内。苦もなく刀打落し。取るなり斬るなり途端の拍子。フシ首は遙かに飛散つたり。ヤレ天晴お手の内。アヽコリヤ。ムハ、、、ヤ出來ました。イヤ申し旦那樣。シテこやつは一體何者でござります。ホヽウ某を欺し討ちにせんと。飛んで火に入る夏の虫。ハヽハヽ、死骸はよきに賴み入る。ハヽお氣遣ひなされますな。エヽシテ只今召しましたは。何の御用でござります。イヤナニ德右衞門。折入つて賴み度きは先刻の朝顏といふ女。今一應呼び寄せてたもるまいか。ハイ畏りましたではござりますが。彼は直ぐに淸水と申す方へ參りました。御用事ならば呼びには遣はしませうが。アヽどうで今夜は御用には。ムヽハテ殘念至極。身は正七つの出立。マよく〳〵緣の。エヽ何と御意なされます。アイヤナニ德右衞門。今の女に謝禮の爲。この三品を其方にしつかりと預け置く間。朝顏が參らば渡してくりやれ。ハイ〳〵。オオコリヤマア夥しいお金。その上結構な女子扇お藥までも。オヽサ其藥は大明國秘法の目藥。甲子の年に出生せし。男子の生血を取つて服すれば。いかなる眼病も卽座に平癒。朝顏に渡してくりやれ。コレハ〳〵。何から何まで。お心を籠められた下され物。參り次第相渡し。悅ばしますでござりましよ。地と受取る折しも時計の七つ。詞ムヽアリヤもう七つの刻限。地と數ふる内に岩代多喜太。裝束改め旅出立。フシ同勢引連れ立出で。詞イザ駒澤氏。出立仕らう。地とすゝめる詞に治郎左衞

門。衣服繕ひ立出づれば。見送る亭主が暇乞ひ。心そぐはぬ駒澤岩代フシハズミ打連れてこそ出でて行く。地跡見送つて徳右衛門。詞ハヽア同じ侍でも黒白の違ひ。意地くね悪い岩代に引きかへ。情深い駒澤殿。アヽあつぱれの侍ぢやな。ヤそれはそうと朝顔に。今夜の禮にはそぐはぬ下され物。ハア何ぞ様子のありさうな事。地フシと思案の折から。地深雪は何か氣にかゝり。座敷しまうてうと〳〵と。フシ又立歸る切戸の内。地徳右衛門目早やに見て。詞オヽ朝顔か遅かつた〳〵。宵のお客様が。も一度呼びにやつてくれいとおつしやつたれど。清水へ往たと聞いた故。お斷り申したれば。今の先お立ちなされた。しかしマア悦びや。大枚のお金と扇。又結構な目藥。わが身にやつてくれいと。ソレ此様にお預けなされたわいの。是はマア〳〵冥加に餘る事。お禮申さいで殘り多い。ガ申し〳〵旦那様。此扇に何ぞ書いてはござりませぬか。ちよつと見て下されませ。オヽドレ〳〵。エヽ金地に一輪の朝顔。露のひぬまが書いてあるわい。裏に。宮城阿曾次郎事。駒澤治郎左衛門と書いてあるぞや。エヽアノ宮城阿曾次郎事。駒澤治郎左衛門とその扇に。オイノ。ハヽア。地はつとばかりに俄かの仰天。詞エヽ知らなんだ〳〵知らなんだわいな。道理でよう似た聲と思うたが。そんならやつぱり阿曾次郎様であつたか。申し〳〵旦那様。其お客様はいつお立ちなされたえ。詞オヽ今の先の事ぢや。ガわが身は又おドロ染か。エヽドロ染どころか。年月尋ねる夫でござんすわいな。かういふ内も心がせく。追付いてたつた一言。地とソレ此様にお預けなされたわいの。是行かんとするを引き留め。詞アヽコレ〳〵〳〵マア〳〵〳〵待ちや〳〵。エヽ折悪う雨も降出し。この暗いに一人は危ない〳〵。イエ〳〵〳〵縱へ死んでも厭ひはせぬ。サヽヽヽそれはそうでも首日の身で危ない〳〵　イエ〳〵放して下さんせ。是はしたり亢ないと言ふに。イヤ〳〵放して〳〵と。地突退け刎退け。杖を力に降る雨も。いつかな厭はぬ女の念力跡を。慕うて三町へ追うて行く。地名に高き街道一の大井川。篠を亂して降る雨に打交りなる霹靂。漲り落つる水音は物凄くもまた。フシすさまじき。地夫を慕ふ念力に道の難所も見えぬ目も。厭はぬ深雪がこけつ轉びつ。やう〳〵爰に川の傍。詞ナウ川越し達。駒澤治郎左衛門様といふお侍。もう川をお越しなされたか。まだか聞かして聞かして。地といふ聲さへも。フシ息切れの。地聲に川

越口々に。詞オ、其侍は今の先渡つた。ガ俄かの大水で川が留つた。笑止地笑止とばかりにて。フシ皆ちり〳〵に行過ぐる。詞ヤア。ナニ川が留まつた。ハ、ア。地悲しやと張詰めし。力も落ちて伏轉び。スエテ前後不覺に。泣きけるが。地又起き上つて見えぬ目に。空を睨んで。詞天道樣。エ、聞えませぬ〳〵〳〵わいな。此年月の艱難辛苦も。どうぞも一度其人に。逢はしてたべと片時も。祈らぬ間とてもないものを。今日に限つてこの大雨。川留めとは〳〵エ、何事ぞいの。思へば此身は前の世で。いかなる事の罪せしぞ。扨も〳〵。地フシあぢきなや。地こがれこがれた其人に。逢うても知らぬ盲目の。此目はいかなる惡業ぞや。夫の跡を戀ひ慕ひ。石になつたる松浦潟。カン領布振山の悲しみも。身に比べては數ならず。三千世界を尋ねてもこんな因果が又と世に。あるべきかはと口說き立て。拳を握り身を震はし。泣涕こがれ歎きしはフシ餘所の。見る目も哀れなり。地やゝあつて起直り。詞オ、さうぢや〳〵。とても添はれぬ身の業因。この川水の增りしは。所詮死ねとの事なるべし。未來で添ふを樂しみに。爰を三途の岸と定め。地弘誓の船に法の道。急がんものと泣く〳〵も。夫を戀ひし小石の數。袖や袂に拾ひ込み。南無阿彌陀佛の聲もろとも。既に飛ばんず其所へ。ヤレお待ちなされ深雪樣と。聲に恟りけしとむ內。駈けくる關助德右衞門。かくと見るより抱きとめ。詞マア〳〵お待ちなされませ。イヤ〳〵誰かは知らねど放して〳〵。マア〳〵待たしやれ朝顏殿。コレ關助殿とやらが見えたぞや。ハ、ア下郎めでごはります。先づ〳〵氣をお鎭めなされませ。地と無理に手を取りフシ抱きのくれば。詞ヤア關助か。遲かつた〳〵〳〵わいの。此年月艱難して。尋ねこがれた阿曾次郎樣に。折角逢うたに目くらの悲しさ。それとも知らず別れたれど。どうやらお聲が氣にかゝり。戻つて聞けばやつぱり其人。おのれやれ追付かうと。跡追うて來たれば此川留め。關助どうせうぞいの〳〵〳〵。オ、お道理だ〳〵〳〵御尤もでござります。何が拙者めも。あなた樣の行方を。尋ね廻る內。一昨日の夜の夢に。淺香殿に戎屋德右衞門方にござると。言はしやると思へば日が覺め。シヤ何でも不思議と。夜を日に繼いで參つた甲斐あつて。すつての事に危ない所を。ヤレ〳〵嬉しや〳〵〳〵なハ、、、、。イヤモ。

下郎めがお日にかゝる上は。駒澤様にお添はせ申す。しかし淺香殿は坂東順禮となつて東海道へ尋ねて見える筈。ガお前様にはお逢ひなされしかな。サレバイノその淺香に跡の月濱松で巡り逢うたが。其夜惡者に出合ひ數ヶ所の手疵。死ぬる今はにわしを呼び。嶋田の宿には私が產みの親。古部三郎兵衞といふ人あり。この守刀を證據に尋ね行き。秋月弓之助が娘と。名乘つて逢へといふ敎へ。可愛やつひに死にやつたわいの。ムヽスリヤ淺香殿には最期とや。ホイ。地はつとばかり驚く內。始終聞き居る德右衞門。詞ムヽそんならお前は。秋月弓之助様の御息女。又淺香といふは。我が娘であつたか。ムン。地と心にうなづき件の短刀。拔く手も見せず腹へぐつと突立つれば。コハ何事と驚く兩人。詞ホヽ御不審は尤も。ガ先づ〳〵〳〵一通り聞いてたべ。ハハア私事はそのお尋ねなさるゝ。古部三郎兵衞と申す者。則ち。あなた様の祖父。秋月兵部様には三代相恩。若氣の誤り奧女中と忍び合ひ。お手討になる所を。弓之助様に助けられ。女諸共國を立退き。產み落せしは女の子。貧苦の中に育つる內。二つの年に母は病死。男の手で育てもならず。伯母が方へこの短刀を添へて養子にやりしが。廻り〳〵て思はずも。親が命を助けられし。秋月様へ御奉公。死んでも忠義を忘れず此親を。導きをつたか。オヽ出かしたな。又最前駒澤様の仰せには。唐土傳來の日藥。甲子の年の。男子の生血にて服する時は。いかなる眼病も卽座に平癒との事。則ち。某甲子の生れなれば。我が血汐を以て。件の藥に調合し。早くあなたへサヽ早く〳〵。地實もと關助用意の水呑取出し。手負ひの血汐受止め〳〵。泣入る深雪が懷中の妙藥取出し差寄れば。深雪受取りわが夫の情にあまる賜物と。押戴き〳〵。只一口に呑み干せば。不思議や忽ち兩眼開き。蟻の這ふ迄見えすくにぞ。深雪が嬉しさ關助も。フシ悅び合ふぞ道理なり。詞ア、嬉しや。最早この世に望みなし。いづれもさらば地さらばと刀引廻し。笛のくさりを刎切つて。名のみ流るゝ大井川。フシ水の泡とぞなりにける。地跡や枕に取縋り。わつとばかりに泣く涙。露のひぬ間の朝顏も。開きし此日は盲龜の浮木優曇華の。花にまさりし夫の賜物二つには。吾故この世に亡き人かと。取付き歎くを關助が。諫める後に祐仙が。深雪やらぬと取付くを。首筋摑んで擔ぎ上げ。川へさんぶと水煙。早や明け渡る鳥の聲。山田の

惠みいや増る。茂れる朝顔物語末の。　世迄もいちじるし